

令和七年度一般選抜前期日程
小論文問題紙

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題紙を開いてはいけません。
- 二、小論文の問題紙は、七ページあります。
- 三、解答用紙は三枚、草案紙は三枚あります。
- 四、受験番号は、監督者の指示に従って、各解答用紙の指定された箇所必ず記入下さい。
- 五、受験番号および解答以外のことを解答用紙に書いてはいけません。
- 六、解答は、すべて解答用紙の指定された欄に縦書きで記入下さい。
- 七、答案作成にあたっては、原稿用紙の一般的な使い方に従い下さい。
- 八、解答用紙のみを提出し、問題紙および草案紙は持ち帰り下さい。

小論文問題

次ページ以降の課題文（一）は、今井むつみ・秋田喜美著『言語の本質 ことばはどう生まれ、進化したか』（中央公論新社、二〇二三年）の一部であり、課題文（二）は、秋田喜美氏へのインタビューをまとめた記事（「オノマトペから探る「言語」の不思議な世界」『看護教育』六四巻五号、五四一―五四八頁、二〇二三年）の一部である。これらの文章を読んで、次の問一から問三に答えなさい。なお、出題にあたり見出しを省略し、横書きの文章は縦書きに改めた。

問一 課題文（一）より、ことばの意味変化がコミュニケーションに与える影響について、著者たちはどのように問題を提起しているか。三〇〇字以内で記述しなさい。

問二 課題文（二）より、医療、看護にオノマトペを使えるか、という問いに対する秋田氏の考えを三〇〇字以内で記述しなさい。

問三 オノマトペを活用してコミュニケーションを図る際の問題点とその対応策について、あなたの考えを四〇〇字以内で述べなさい。

課題文(一)

私たち日本語者はあまりにも当たり前に使っているオノマトペ。しかも、オノマトペがエライとかスゴイと思っている人は少数派で、子どもが使う幼稚なことばであるとか、普段づかいのことばとしてふさわしくないとか、やや気の毒な扱いである。そもそもオノマトペはちゃんとした(れっきとした)ことばなのだろうか？

(中略)

現在、世界のオノマトペを大まかに捉える定義としては、オランダの言語学者マーク・ディンゲマシセによる以下の定義が広く受け入れられている。

オノマトペ…感覚イメージを写し取る、特徴的な形式を持ち、新たに作り出せる語

かなり抽象的な定義である。「特徴的な形式を持つ」という点は、オノマトペに重複形が多いことから納得できそうである。「新たに作り出せる」という点も、先の「(注1)ジュージャー」のような例から明らかだろう。では、「感覚イメージ」を「写し取る」とはどのようなことを意味するのだろうか？

(中略)

いわゆる擬音語は、「ニャー」「パリーン」「カチャカチャ」のように聴覚情報を中心に表す。擬態語

の中には、「ザラザラ」「ヌルッ」「チクリ」のように触覚情報を表していると思えるものもあれば、「スラリ」「ウネウネ」「ピョン」のように視覚情報に注目しているものもある。さらに、擬情語と呼ばれるオノマトペは、「ゾクッ」「ドキドキ」「ガツカリ」のように第六感とでもいべき身体感覚や心的経験を表す。

多くの形容詞と同様、オノマトペは感覚のことばなのである。

(中略)

ことばの意味変化は、しばしばミスコミュニケーションを生む。多義性にパターンがあるとはいっても、言語によって、方言によって、世代によって、意味の広がり方には少なからず差異が生じる。コミュニティ内における独自の意味の発展には、メンバー同士の絆を深めるような側面もある。

たとえば、若い世代の間で「やばい」が〈とてもよい〉や〈とてもおいしい〉の意味で使われだすですでにしばらく経つが、使い慣れていない話者にはよい意味なのか悪い意味なのかわからず、解釈に当惑するだろう。また、「普通にかわいい」や「普通にいいね」のような言い方に違和感を抱く読者もいるのではなからうか。若者たちは「普通に」を、〈ありうる想定に反して十分に(かわいい・いい)〉のような意味で使っているらしい。

さらに、NHK放送文化研究所の2019年のウェブ記事には、「カレーがほんとに好きで、なんなら毎日食べてます」のような若者ことばに関する調査報告が紹介されている。「なんなら代わりに行きましようか?」のような、何かを提案するときを使う「なんなら」にしか馴染みのない読者には、ただの誤用に思えるかもしれない。若者たちは、どうやら〈さらに言えば〉や〈下手をすると〉のようなニュアンスを意図しているらしい。彼らのなかには、伝統的な「提案」の意味を知らない人も多

いようだ。

このように、ことばの意味の派生にはある程度のパターンが存在するものの、特定のグループの遊び的な使い方が広がって定着し、結果として前の世代にはつながらが見えないほどの隔たりが生じることもある。そのようなことばは、前の世代にとっては、多義語というよりも同音異義語である。

(注1) 中略の部分で、ある料理に対してその場限りで作られたオノマトペである。

課題文 (二)

——患者さんは身体を介して痛みや違和感を訴え、医療者とコミュニケーションを取ります。その訴えでは「ずきずき痛む」のような表現が頻繁に用いられ、医療現場はオノマトペが飛び交う環境かもしれない。

秋田 病院によっては、オノマトペをあまり使わないようにしているところもあると聞きました。それは、オノマトペという直感的で感覚的な言葉が明確でなく、個人差を生じさせることを懸念するからだと思います。ただ、患者さんにオノマトペを禁止しているわけではないはずで、患者さんから「きりきり痛む」と言われたとき、「きりきり痛むですね」と同じオノマトペで返してあげられると患者さんは安心できると思います。

実際、医療現場でオノマトペを使ったほうがよいかどうかの検証は必要でしょうし、個人的にも気になります。痛みのオノマトペのニュアンスを数値化する研究も行われていますが、言語学的には、オノマトペはほかの言葉より具体性が高い反面、漠然とした部分もあるため、個人・文脈依存の情報があることには留意するべきです。言語学者、心理学者ができることは、慣習的な痛みのオノマトペはそこまで多いわけではないので、それらのオノマトペのニュアンスの何が共通して認識され、どこに個人差が生じ得るのかを特定することだと考えています。それができたら、診療にもオノマトペを十分活かせるようになるかもしれません。

——医療では質的、量的な観点でデータをとらえることが多く、痛みも量的にスケールに置き換えられます。実際は痛みには個人差があり、医療者としてその感覚をつかみ取ることができる経験が大切です。オノマトペの普遍的または個別的な部分から情報をうまくつかみ取ることが重要だと感じます。

秋田 たとえば介護では、利用者さんの身体を拭くときに「すうつとしますよ」「すつきりしましたね」と話しかける場面が想像しやすいように、コミュニケーションを豊かにしたり、会話のタイミングを合わせたりするのにオノマトペは役に立ちます。スポーツ指導でもオノマトペはよく使われていて、たとえば「ラケットを……『ぎゅっ』として！」と言ったときに、この「ぎゅっ」という言葉で力加減や握り方だけでなく、「今だ！」というタイミングも表すことができます。「ぎゅっ」を使わないと、いちいち説明的になり、力を込めるタイミングも逃してしまいます。

また、患者さんからすると、適切な状況や頻度でオノマトペが使われることで、やさしさ、温かさが伝わり、共感が伝わるのかもしれませんが、また、オノマトペはその場限りでつくることができる創造性もあり、たとえば「んぎゅ」と言われても、何となくその強弱の度合いがわかりますよね。患者さんの「んぎゅと痛む」という訴えに耳を傾け、主観的な訴えでも医療者に共感してもらえたら、患者さんはより安心すると思います。オノマトペの創造性と主観性が、効果的に働く場面はきっと多くあるはずです。

——医療では科学に根ざした物事・言葉で教育をしていかなければならないという考えがあると思います。一方で、現場には患者さんがいて、患者さんの苦しみといった主観性に寄り添っていくために、オノマトペを理解、活用できるように言語や五感の豊かさも身につけていければよいかもしれませんね。

秋田 まさにそうですね。子どもに対してもオノマトペを使うべきかはよく論争になります。今井先生や私は、オノマトペは子どもの言語発達に非常に有効だと考えています。医療でオノマトペを使うべきでないという考えや主張ももつともで、安直に発したり頷いたりしたオノマトペにより生じた誤解は、患者さんの生命にかかわることがないとも言えません。先ほど言ったように、オノマトペの

なかでも確かな部分と不確かな部分があり、そこを解明していき、オノマトペをうまく正確に使い、理解することで得られる信頼もあると思います。

製薬会社のファイザーが行ったアンケート調査では、慢性的な痛みを抱えている患者さんの多くが、医療者に自身の痛みを言葉でうまく説明できなかつた経験を有し、8割の方が痛みの表現にオノマトペを活用しているとされています。オノマトペが使われる理由として、「直感的、感覚的に表現できる」「痛みを適切に表現できる」「短い言葉で伝えられる」などがあり、医療者とオノマトペでコミュニケーションが取れたときに「共感してもらえた感じがする」という回答もありました。オノマトペをうまく活用することで、医療者―患者間コミュニケーションが進展し得る興味深い事例だと思います。

(注2) 今井むつみ氏のこと。秋田喜美氏とともに『言語の本質 ことばはどう生まれ、進化したか』を著した人物である。